

Domaine Dandelion

ドメーヌ・ダンドリオン

地域 : Hautes-Côte de Beaune

オート＝コート・ド・ボーン

地区、村 : Meloisey ムロワジー

造り手 : Morgane Seuillot & Christian Knott

モルガーヌ・スイヨール & クリスチャン・ノット



【出会い】

世界各地に優れた造り手がいると言っても、やはりブルゴーニュのワインと、その動向は気になるものです。フランス在住の友人から、「面白いカップルがいるよ」と教えていただき、初めて訪れたのが 2017 年の春。栽培や醸造において未だに保守的なブルゴーニュの地であって、モルガーヌとクリスチャンの 2 人の造るワインは、近代醸造の確かさを持ちながら自然なアプローチを感じさせる、とてもピュアなピノ・ノワールを表現していました。そして 10 月に再訪問した時に足でピジャージュをしている 2 人の姿にはこちらを思わず、照れ笑い。初 VT の 2016 年から続く 2017 年、難しい年からのスタートとなりましたが、彼女たちのように楽しくワインを造る姿を見ると応援したくなります。

2017 年 10 月 合田泰子

ワイナリーについて

【モルガーヌ・スイヨ】

ブルゴーニュ出身。ディジョンの大学で外国語を学び、イギリスのウォーリック大学で政治と歴史を専攻。その後モンペリエ大学で国際プロジェクト交渉(NPI)の修士を修了する。しかし 2013 年にずっと情熱を傾けてきたワインの道を歩むこととなります。ブルゴーニュ大学の AgroSUP 校(ディジョン)でワインの研究と貿易の学部へ登録し、シドニーで研修と学位論文を行う。クリンクルウッド・バイオダイナミック・ヴァインヤード(ハンター・バレー)とスモール・フライ・ワインズ(バロッサ・バレー)で研修し収穫にも携わりました。2015 年の初めにフランスへ戻り、アニエス・パケの元で働きながら、小さな畑を購入。農家の娘という自身の側面を再発見し、同時期にクリスチャンとも出会ったことからドメーヌ・ダンデリオンとしての物語が始まります。2015 年も終わりのことでした。

【クリスチャン・ノット】

シドニー出身のオーストラリア人。アデレード大学でワイン醸造とブドウ栽培を学ぶ。バス・フィリップの元で働いた後、2008 年にフランスへ。ヨーロッパの様々なドメーヌで研修を行う。ドメーヌ・シャンドン・ド・ブリアイユで醸造責任者となる前にドメーヌ・デ・クロワでも働いていた。

新しく購入した、畑は 2015 年まで除草剤を使用していた畑で、現在は馬による耕作や緑肥で土地の状態の回復に努めているけれど、畑が理想的な状態になるまでにはまだまだ時間がかかりそうだ。オート・コート・ド・ボーヌには比較的古い畑も残っているので、それらの畑が、良い状態になるのはとても楽しみなことだ。赤の醸造は、スキンコンタクト中はブドウにはあまり触れずに、バケツによるルモンタージュを行う。スキンコンタクトの最後に軽いピジャージュを行い、プレス。まだごく少量の生産量という事

Racines

もあり、手作業が多く、ビン詰までも手作業で行っている (la chèvre à deux becs)。エチケットや、蠟封にも細部までこだわっていて、楽しくワイン造りをしていることが伝わってくる。

【ドメーヌ名由来】

Dandelion (英語) はタンポポを意味します。フランス語では Pissenlit と書きますが、別名 la dent de lion (獅子の歯) と書きます。私たちそれぞれの母国語である英語とフランス語のどちらでも同じ子音です。あまり人目を惹きませんが、葉も花も根っこも用途はいくらでもあります。粗野な花に見えますが、多くの特性を持った美しい花です。私たちは子供のように綿毛に息を吹きかけたり、風に遠くへゆったりと運ばれる姿に私たちの人生を重ねて見えています。私たちは多くの旅と出会いを経て最終的にブルゴーニュへとたどり着きました。私たちの人生は風に乗って飛び立ち、穏やかに、けれどもしっかりと根を張るこのタンポポのようでもあります。

【エチケットについて】

エチケットに使用している紙はボークリューズ県の今も水車使う製紙工場の手作りのもの。素材は綿やリネン、麻にヤグルマギクの花がちりばめられている。生産者側でボトルのサイズに合うよう切り分け、モルガーヌお手製の鳥のスタンプを押し、手書きで一枚一枚、ドメーヌとキュヴェ名を記入している。バックラベルはメインラベルと同じ材質(花はない)。手作りのスタンプが押印されている。

【蠟キャップについて】

蠟はポーヌのミツバチの蜜蠟を使用。